

## 『民博通信』のオンライン化にむけて

雑誌名	民博通信
巻	164
ページ	27-27
発行年	2019-03-29
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00009411">http://hdl.handle.net/10502/00009411</a>

## 『民博通信』のオンライン化にむけて

2019年3月

『民博通信』は、1977年10月に創刊され、年に4回刊行されて、今号で164号を迎える。この間、2度の大きな改訂がなされ、今日に至っている。このたび、この『民博通信』をオンライン化し、新たな形態で刊行することとなった。ここに、その意図と経緯を記しておきたい。

『民博通信』の創刊に当たって、初代館長の梅棹忠夫は、その目的と性格について、「博物館における主として研究活動に関する情報を、博物館の関係者および民族学研究者など、いわばプロフェッショナルな関心をもつ人たちに連絡、通報するための雑誌である」(『民博通信』の創刊『民博通信』第1号、p.5、1977年)と述べている。梅棹はまた、『民博通信』を「拡大館内報」ともよび、「研究連絡メディア」として位置づけた。そこには、民博の研究活動に基づいた「評論・随想」のほか、「共同研究メモ」や「現地便り」が盛り込まれ、館員の刊行物一覧が克明に掲載された。

2002年6月からは、版型を大判に改め、カラーページも組み込んだかたちの『民博通信』が刊行されるようになった。「特集」のかたちで、民博で進んでいる研究活動のひとつのトピックに焦点を当てた企画が中心となり、それ以外にいくつかの研究プロジェクトや刊行物の紹介が取められた。

2010年には、より多くの活動をより広く伝えるため、構成が再び改められた。「評論・展望」という、教員が自身の研究の展開や展望を論じる場を設けるとともに、共同研究・機関研究・国際研究集会などの最新の情報を研究者コミュニティに広く発信することに主眼が置かれることになった。この構成は、今号まで継承されてきている。

この間、民博をとりまく学術研究の環境も、また情報環境も大きく変化している。学術研究と社会との関係があらためて問い直され、研究機関が一方的に学術情報を社会に対して発信するだけでなく、学術研究そのものを社会との協働のもとで進めることが前提とされるようになってきた。もちろん、学術研究の深化には、高度の専門性が要求される。ただ、既成の研究の枠の中に留まっているだけでは、新たな地平は開けない。特定の分野の研究を徹底的に突き詰めると同時に、その成果を分野を超えて広く共有することで、はじめて知の革新(イノベーション)が実現されるであろう。「研究連絡メディア」としての『民博通信』も、より広い読者のあいだで「共有」されることが要請されてきている。

こうした広範な読者への発信という点で、紙を媒体とするメディアが、発行部数という限界を抱えていることはいうまでもない。また、現在、民博で進行している共同研究、特別研究、地域研究や「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」などの多岐にわたる研究活動の進行を、すべて、しかもその研究の進行に合わせて、紙媒体で紹介することは難しい。

こうした状況に鑑み、研究の最新情報を機動的に、しかも潜在的な読者も含めた多くの方々とは共有することを目的に、今回、『民博通信』をオンライン化することにした。館員の刊行物は、すでに、民博のウェブサイトですべて更新されるかたちで公開されている。また、オンライン化した『研究年報』のなかでも、個人別にその1年の成果がまとまったかたちで公表されている。オンライン化した『民博通信』に、それらの情報を再掲する必要はないであろう。また、教員が自身の研究の展開や展望を縦横に論じる場合は、それにふさわしい別のかたちで設けられることと思う。新しい『民博通信』は、民博における多彩な研究の進行を、幅広い読者と共有する内容に特化されるはずである。それは、梅棹の構想した「研究連絡メディア」を、現在の情報環境の中で、伝達範囲を最大限に「拡大」して実現するものといってもよい。なお、掲載する情報はすべてダウンロードして印刷できるようにするなど、紙媒体での閲覧も可能な形態を確保することを考えている。

新たなかたちの『民博通信』第1号(旧『民博通信』通巻165号)は、2019年度中に発信できる予定である。この場を借りて、これまで『民博通信』に親しんでいただいた多くの読者の方々に深甚なる感謝の意を表するとともに、新たな『民博通信』へのご支援とご協力を心よりお願い申しあげる。

国立民族学博物館  
館長 吉田憲司